

2022年度 事業報告書

(2022年7月1日-2023年3月31日)



INSTeM Inter-field Network for Science,
Technology and Media Studies

一般財団法人 INSTeM

一般財団法人 INSTeM
2022 年度 事業報告書

一般財団法人 INSTeM は、アカデミズムとジャーナリズム、専門家と非専門家、人間を対象とする自然科学と人文社会科学などの中間の情報発信、交流、討論などを促進する組織として、科学技術論及びメディア論を中心とした社会のハブとなる調査、研究及び情報発信事業を行うことにより、社会の健全な育成に寄与することを目的として 2022 年 7 月 1 日に設立された。INSTeM は Inter-field Network for Science, Technology and Media Studies の略である。

2022 年度は、主に財団の運営体制の整備を行いながら、INSTeM ウェブサイトの立ち上げ・運営と国内セミナーおよび国際シンポジウムなどを開催した。

各個別の事業内容は下記のとおりである。

① 一般財団法人 INSTeM の設立・役員

一般財団法人 INSTeM（以下 INSTeM）は 2022 年 7 月 1 日に登記され、設立された。評議員、理事、および監事は次の方々である。（肩書は 2023 年 3 月 31 日現在）

評議員	草原真知子	（早稲田大学・名誉教授）
評議員	須永剛司	（はこだて未来大学・特任教授、東京藝術大学・名誉教授）
評議員	中間真一	（株式会社ヒューマンルネッサンス研究所・エグゼクティブ・フェロー）
評議員	前田健喜	（一般社団法人日本協同組合連携機構(JCA)・協同組合連携 2 部長）
評議員	吉見俊哉	（東京大学・教授）
評議員	石渡真維	（ココネ株式会社・取締役副社長）
理事長	千良鉉	（ココネ株式会社・取締役会長）
理事	伊藤守	（早稲田大学・教授）
理事	国枝学	（株式会社 NTT ArtTechnology・代表取締役社長）
理事	佐倉統	（東京大学・教授）
理事	高橋真理子	（ジャーナリスト、元・朝日新聞・科学コーディネーター）
理事	深代千之	（日本女子体育大学・学長）
理事	松原洋子	（立命館大学・副学長）
監事	永田金司	（永田金司税理士事務所）

② 組織運営体制の整備

財団の設立日である 2022 年 7 月 1 日に、INSTeM ウェブサイト(URL: <https://instem.jp>)を開設し、設立発起人代表の千良鉉、設立発起人佐倉統と水越伸の連名による設立あいさつと、当財団の理事、評議員の一覧を公開した。

また 7 月 8 日より事務局が稼働をはじめ、ココネ株式会社のご協力のもと、山西宏樹行政書士事務所、税理士法人アークネットのサポートを得て、INSTeM の組織運営体制の整備を進めた。

研究部、および事務局体制は次のとおりである。

- 研究部： 佐倉統（理事・ディレクター）
水越伸（サブディレクター）
- 事務局： 神谷説子 - 事務局長・研究部兼務（INSTeM ウェブサイト編集担当）
松井貴子 - 研究部兼務（『5: Designing Media Ecology』編集担当）
田島美和 - 事務局総務担当

③ ウェブサイト/SNS

(1) INSTeM ウェブサイト

7 月 1 日に立ち上げたウェブサイトは、10 月 17 日に本格的に稼働を開始した。INSTeM のロゴはマルヤマデザインに、ウェブサイトの構築はサシミメディアラボに依頼した。ウェブサイトは INSTeM の活動の柱のひとつとなるメディアであり、オリジナルエッセイや写真、音声作品、INSTeM が展開するさまざまなプロジェクトの報告などを掲載していくプラットフォームとなる。また今後出版される雑誌『5: Designing Media Ecology』と連動して展開していく予定である。

ウェブのコンテンツは、INSTeM の関心領域である科学技術社会論とメディア論を軸に、“Science and Technology”、“Media & Communication”、“Arts & Culture”、“Life & Practice”という 4 つのカテゴリーに属するテーマや内容となっており、身近な科学技術やメディアを捉える視点を提供する役割を果たすものでもある。また、INSTeM からのお知らせや報告のためのカテゴリーとして“Activity & Reports”も設けた。10 月 17 日以降、3 月 31 日までに合計 13 本の記事を掲載した。

(2) INSTeM Online Store の設置

INSTeM より発行予定の『5: Designing Media and Ecology』の販売、またこれまでのバックナンバーの販売のために、INSTeM Online Store の日本語サイト (URL: <https://instem.stores.jp>)および英語サイト (URL: <https://instem-e.stores.jp>)を構築した。

『5』の冊子版と PDF 版の購入が可能となっている。

(3) ソーシャルメディア

Facebook、Twitter (@instem_office)、Instagram (@instem_office)のアカウントを立ち上げ、ウェブサイトの更新やイベント開催にあわせて SNS での発信をしていく体制を整えた。

④ イベント

2022 年度は 11 月にキックオフシンポジウム、2023 年 2 月にラウンドテーブルディスカッション、3 月に研究会を開催した。また INSTeM ライブという声のメディア実践を行った。個別の内容は下記のとおりである。

(1) INSTeM キックオフシンポジウム 「学問と社会の間をいかに育むか」

日時： 2022 年 11 月 12 日、10 時から 12 時 30 分

開催場所： オンライン(Zoom)

登壇者：

〈INSTeM より〉

佐倉統 (理事・研究部ディレクター)
水越伸 (研究部 サブディレクター)
神谷説子 (研究部 ウェブエディター)
松井貴子 (研究部 『5』 エディター)
山本貴光 (研究部 コーディネーター)
吉川浩満 (研究部 コーディネーター)
毛利嘉孝 (研究部 コーディネーター)
千良鉉 (理事長/ココネ株式会社取締役会長)

溝尻真也 (目白大学)

宮田雅子 (愛知淑徳大学)

〈コメンテーター〉

居原田遙 (キュレーター/東京藝術大学)、宇治橋祐之 (NHK 放送文化研究所)



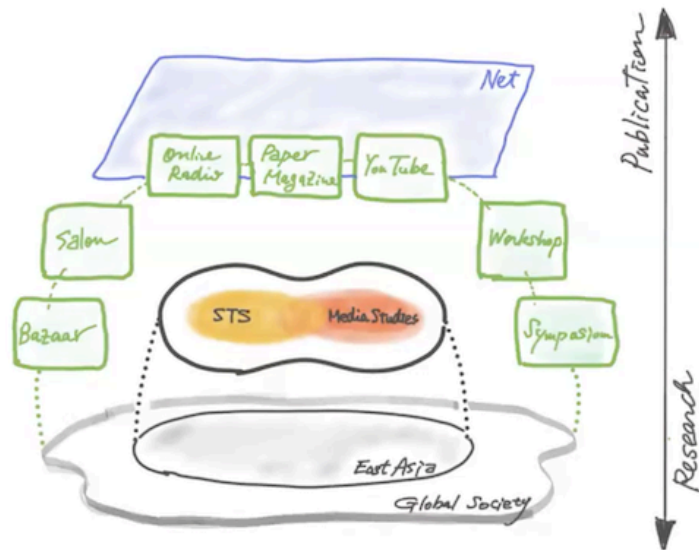
《概要》

本シンポジウムは、INSTeM の設立後初めて一般公開の形で、Inter-field Network for Science, Technology and Media Studies (INSTeM) という名前を掲げた当財団の設立された経緯やめざすもの、具体的な活動の紹介をする場として開催された。

冒頭佐倉より、INSTeM は「人間の知識とはなにか」について「知る (science)、作る (technology)、伝える (media)」という 3 つの体系を軸に研究し、異なる領域や組織などの間をつなぐ、組織の規模は大きくせず、発想の切り口で独自性を出す、そしてアジアの視点を重視するという、当財団の大きな構想と方向性が紹介された。

続いて水越より、INSTeM 構想の概念図と活動の概要の説明があり、具体的に展開する活動として、①情報発信・出版活動、②イベント、③研究プロジェクトについての概要が各担当者より紹介された。①については INSTeM のウェブサイトおよび、INSTeM の発想の根本にあった日英併用のリトルマガジン 『5: Designing Media Ecology』、そこから派生した音声メディアプロジェクト Radio5 と Live5 のこれまでの活動、またこれからは INSTeM として、『5』の第 2 期を展開していくことにむけた紹介があった。②については、『5』の編集委員でもある毛利が展開してきた「ポストメディア研究会」を軸とした国際シンポジウムのネットワークを発展させること、③については、吉川、山本による、コンピュータのデスクトップを自分専用の図書館のようにマッピングする「知識 OS」の開発構想の紹介がなされた。

これらの紹介を経て、ゲストコメンテーターからのコメントをもとにディスカッションが行われた。今後のINSTeMの活動の「作戦会議」の場だという発言があったが、まさに多岐にわたる論点が出た。そのひとつとして居原田氏より、INSTeMが活動を展開する中で、リアル／ヴァーチャルを問わず「場所」をどう考えていくのかという問いかけがあり、その維持、継続という困難をいかに乗り越えながら、場所性を確固たるものとしてデザインしていくかが今後の課題となるという議論が展開された。また、宇治橋氏からは、NHK 教育テレビは番組



INSTeM想像図 (2022.1.24.水越伸作成)

に「出る人」、「作る人」、「見る人」をつなぎながら、いつか「見る人」が「動く人」になってほしいと考えているが、学問と社会の間を育むことを目指して INSTeM はテーマをどう選び、またメディアをどう全体設計していくのか、という問いかけがあった。INSTeM は科学技術社会論やメディア論という領域やフィールドで、多様な人々をつないだ後に知識をどのように再生産させていけるか、そのしくみづくりは今後の重要な課題であるという認識が共有された。

最後に千理事長より、INSTeM にさまざまな人が集い、社会やテクノロジーの影響、人間そのものを観察し、考察し探っていくプロセスを経て、それがしっかりと形になっていくこと、また INSTeM がしなやかなシステムであることを期待しているとのコメントがあった。オンライン開催の本シンポジウムには、78名が参加した。

(2) Round Table Discussion Post-University: New Formation of Knowledge Production and Scholarly Apparatuses /ラウンドテーブル・ディスカッション「ポスト・ユニバーシティ：知識生産の新しい編成と研究装置」

日時： 2023年2月19日(日)17:00-19:00

開催場所：オンライン (Zoom)

登壇者：

マイク・フェザーストーン (ロンドン大学ゴールドスミス)

玉利智子 (ロンドン大学ゴールドスミス)

佐倉統 (INSTeM/東京大学)

水越伸 (INSTeM/関西大学)

村田麻里子 (関西大学/ライデン大学)
毛利嘉孝 (INSTeM/東京藝術大学)

参加登録者：80名

《概要》

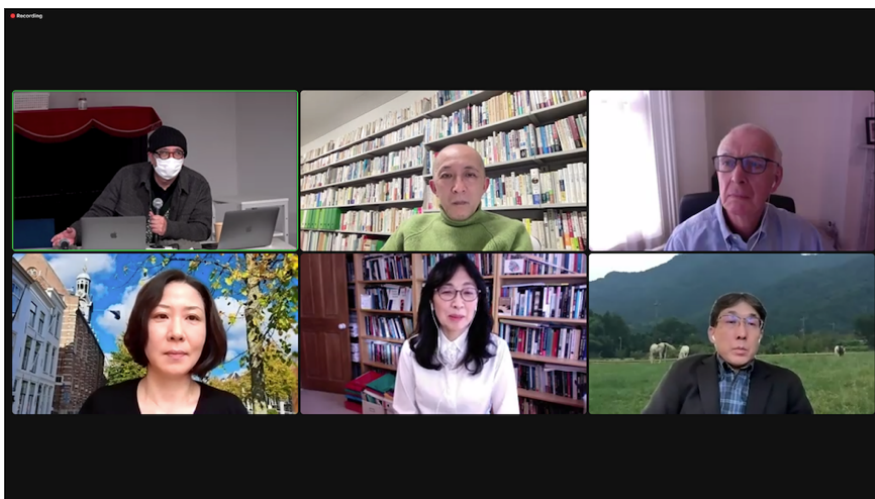
本ラウンドテーブルは、2023年2月18日より2日間開催された「ポストメディア東京会議 2023」との共催企画である（主催：東京藝術大学大学院国際芸術創造研究科毛利嘉孝研究室ポストメディア研究会）。オンラインで行われたこのセッションの登壇者は東京、大阪、イギリス、デンマーク、オランダから参加し、登壇者の発言は逐次通訳された。

「ポスト大学/知識の新生産様式」というテーマのもと、既存の大学の枠組みを超えた、新たな知識の生産のありかたをめぐるさまざまな論点が提示された。フェザーストーン氏と玉利氏からは、現在の大学の研究者は論文とその本数やインパクトが評価の指標にされがちであるが、そのような生産性を上げることが質の向上にはつなげていないという問題意識が示された。デジタル化やAIの学術に対する影響も見込まれる中、大学における知識の生産はなんのためにあるのかという問いは極めて重要であり、社会学者ラトゥールの”Education is not problem solving, but finding what the problem is.”という言葉も紹介された。ミネルヴァ大

学やフランスの Science Po によるカリキュラム改革など、新たな大学教育のあり方を模索している事例はあるものの、現状の高等教育機関は、直面する問題に十分応えられていないという危機感も共有された。

水越は、「本当の知識は大学の研究室ではなく、日々の生活や実践の中にある」というデュイの教育哲学をひき、

INSTeM の構想の核でもある、『5: Designing Media Ecology』をはじめとするメディア実践とメディア・リテラシーの理論の循環を紹介した。ミュージアム研究者の村田は、オランダにあるボイマンス・ヴァン・ベーニンゲン美術館の「デポ・ボイマンス・ヴァン・ベーニンゲン」という収蔵庫にて、美術館の舞台裏がすべて可視化されている例を紹介し、ミュージアムの知の新生産様式は、理論が中心の大学の足腰の弱さを補完する役割を担うと述べた。佐倉は、生物が持つ繁殖のための戦略と繁殖成功率の関係を引き合いに出し、必ずしもメジャーな戦略が最大の効果を生むわけではないことを指摘。現在求められているのは既存の大学の枠組みを超えたオルタナティブであり、それを発展させる戦略であろうと述べ、毛利もフレキシブルで流動的な仕組みを作り、発展させていくことへの共感を示した。本ラウンドテーブルは、新たな知識の新生産様式のひとつの形を提示すべく立ち上がった INSTeM にとってその使命を改めて実感する内容となった。



(3) INSTeM ライブ

INSTeM ライブとは、オンライン上での声だけによる場づくりの実践である。月に1回程度バーチャルに集い、動画チャットアプリを使ってさまざまなテーマを語り合う空間を展開している。コアメンバーは水越伸(研究部サブディレクター)、神谷説子(研究部エディター)、忠聡太(福岡女学院大学)、溝尻慎也(目白大学)。小さな公開ミーティングのような場であり、参加者はざっくばらんに話をしたり、耳を傾けて参加するというスタイルをとっている。2022年度は次の3回開催した:

① 2022年12月10日 テーマ:「2022年を振り返る」 参加者若干名

INSTeM ライブのコアメンバーを中心に2022年を回顧した。コロナ禍が続く中、ロシアのウクライナへの軍事侵攻が起これ、国内では安倍晋三元首相の銃撃事件が起こるなど、なにかと先行きの不透明な空気が支配したことなどが話題に上った。

② 2023年2月25日 テーマ:「アフター『ポストメディア東京会議2023』」 参加者若干名

2月18日から2日間開催された国際会議『ポストメディア東京会議2023』。INSTeMもラウンドテーブルディスカッションを共催した。この会議の主催者である、INSTeM コーディネーターの毛利嘉孝と、サブディレクターの水越伸会議の裏話を語るとともに、日本のカルチュラル・スタディーズをめぐる国際学会のこれまでの歩みを振り返った。

③ 2023年3月25日 テーマ:「パンデミック4度目の春 in 台湾」 参加者若干名

INSTeM サブディレクターの水越伸とコーディネーターの毛利嘉孝は3月に台湾を訪問し、それぞれ台湾カルチュラルスタディーズ学会、Taiwan Contemporary Culture Lab 主催のシンポジウムで講演した。久しぶりに訪れた台湾の街や人々の様子、登壇した学会やシンポジウムのことなどが話題に上った。台湾からの参加者もあり、話が盛り上がった。

(4) 研究会 「文化としてのロボット研究会」

日時:2023年3月9日 14:30-17:30

場所:AP 新橋 5階 M ルーム

発表者:

浅田稔(大阪大学)

佐倉統(東京大学/理研 AIP/INSTeM)

板津木綿子(東京大学)

久野愛(東京大学)

藤嶋陽子(立命館大学)

岡田美智男(豊橋技術科学大学)

池上高志(東京大学)

巽孝之(慶應義塾大学)

コメンテーター:伊藤亜紗(東京工業大学)

本研究会は、社会におけるロボットの役割や技術動向を考えるための補助線として、テーマ・領域別にロボットをめぐる文化論的考察を行うことを目的として開催した。発表者の専門領域は演劇、文学、ファッション、フェミニズムなど、多岐にわたった。人工知能（AI）とロボットの境界がときに曖昧になりながらも、そのゆらぎもまた、「ロボットの存在」の表象の一側面であるとして、議論を深めた。研究会の成果は日本ロボット学会の特集号として刊行の予定である。

以上

2022年度事業報告には、「一般社団法人及び一般財団法人に関する法律施行規則」第34条第3項に規定する附属明細書「事業報告の内容を補足する重要な事項」が存在しないので作成をしない。